

NY商品、原油が続落 ロシアの軍事活動の縮小を受け 金は下落

29日のニューヨーク・マーカンタイル取引所（NYMEX）で原油先物相場が続落した。WTI（ウエスト・テキサス・インターミディエート）で期近の5月物は前日比1.72ドル（1.6%）安の1バレル104.24ドルで終えた。ロシア政府がウクライナでの軍事活動の縮小を表明し、停戦協議が進展したと受け止められた。ロシア産原油の禁輸に伴う需給逼迫の懸念が和らぎ、売りが優勢になった。

ただ、情勢は流動的との見方に加え、主要産油国の生産調整の協議を31日に控える。様子見の市場参加者も多く、売りの勢いは次第に弱まり、下げ幅を縮めて終えた。

ロシア国防省は29日、ウクライナの首都キエフや北部チェルニヒウの軍事活動を縮小すると発表した。停戦協議の前進で欧米の対ロ経済制裁が緩むとの観測が浮上した。需給逼迫が和らぐとの見方から、原油先物は一時98ドル台と7%下げた。

ただ、売り一巡後は下げ幅を縮小した。ロシア軍は29日にチェルニヒウを攻撃したと伝わった。先行きを見極めたいとして、売りに傾けた持ち高を解消する目的の買いが入った。

石油輸出国機構（OPEC）加盟国とロシアなど非加盟の産油国から成る「OPECプラス」は、31日の会合で5月の生産枠について協議する。ロイター通信は29日、サウジアラビアとアラブ首長国連邦（UAE）が増産拡大に消極姿勢を示したと報じた。現在の穏やかな増産ペースを維持するとの見方が広がり、当面の需給の締まりを見込む買いを誘った。

金先物相場は下落した。ニューヨーク商品取引所（COMEX）で、29日から取引の中心になった6月物は前日比26.7ドル（1.4%）安の1トロイオンス1918.0ドルで終えた。一時は1893.2ドルと中心限月として2月末以来の安値を付けた。ロシアの軍事活動の縮小を受け、リスク回避目的で買われやすい金は売られた。ただ、米長期金利の低下で金利の付かない金に投資妙味が増したと見た買いが入り、下げ幅を縮小して終えた。

東洋インキ、印刷用インキ値上げ 来月出荷分

東洋インキは4月1日出荷分からチラシなどの印刷に使うオフセットインキを値上げする。上げ幅は、大量印刷に使う輪転機向けで1キログラム50円以上、少量での印刷に使う枚葉機向けで同60円以上などで、平均10%程度とみられる。ナフサ（粗製ガソリン）高に伴い顔料や溶剤などの原料が値上がりしており、製品価格に転嫁して採算を改善する。値上げの発表は2021年8月以来となる。

印刷用インキでは、21年8月に同社とDICが相次いで同50～100円の値上げを発表。需要家側は昨年12月までにほぼ満額を受け入れ、インキの流通価格は約15%上昇した。インキの価格が10～20%上昇すると、チラシを作るコストが1～2%ほど上がるとされる。

ただ、需要は鈍い。インキ業界では「新型コロナウイルス禍前と比べオフセットインキの需要は15～20%減った」との声もある。スーパーの折り込みチラシの需要が戻らないことなどが響いた。再値上げは、浸透に時間がかかる可能性もある。

富士フィルム、水性インク原料工場を増設 30億円

富士フィルムは28日、インクジェット向け水性インクの色材を生産する米工場を増設すると発表した。約30億円を投じ、今春に稼働を始める新工場を増設する。インクジェット方式は少量多品種で印刷できる特徴がある。特に環境負荷が小さい水性インクは、食品や日用品などのパッケージ用途で需要が伸びており生産能力の増強で対応する。インクジェット向け水性インクの色材となる、顔料を水に分散させた液体を増産する。今春に稼働を開始する米デラウェア州の新工場に約30億円を投じて生産設備を増設する。増設分の延べ床面積は1000平方メートルで、2023年夏の稼働を予定する。

これまで顔料分散液は英スコットランド工場で生産してきたが、需要の増加にともなって米国でも生産体制を整える。工場の増設により、同社の生産能力はインクに換算すると年6000トン超と従来の3倍になる見込み。



インクジェット向け水性インクの色材となる、顔料分散液を米国で増産する

シカゴ穀物概況・29日

29日のシカゴ市場で主要穀物は軒並み続落した。ロシア国防省が29日、ウクライナの首都キエフや北部チェルニヒウの軍事活動を縮小すると発表し、停戦交渉が進むとの期待が広がり売られた。主要産地である両国からの輸出減が深刻化するとの懸念が薄れた。中国・上海市のロックダウン（都市封鎖）を受け原油が下げたほか、米中西部産地の降雨見通しも相場を下押した。

小麦は大幅に続落した。5月物終値は前日比42.75セント安の1ブッシェル=10.1425ドルと、中心限月物終値ベースで3月1日以来の安値をつけた。

大豆は「中国の経済活動がロックダウンのため低下し、米産大豆の輸入が減る」（米穀物アナリスト）との懸念も売り材料だった。5月物終値は同21.25セント安の16.43ドル。

トウモロコシも続落した。5月物終値は同22.25セント安の7.2625ドル。

アンチモニー、10年半ぶり高値圏 コロナで供給減

合成樹脂を燃えにくくするレアメタル（希少金属）の一種、アンチモニーの国際価格が一段と上昇した。欧州市場のスポット（随時契約）価格は3月下旬時点で1トン1万5050ドル前後。直近の高値だった昨年10月からさらに1割ほど上昇し、2011年9月以来の高値圏にある。

新型コロナウイルス禍で原料鉍石の中国向けの供給が細っていることが主因だ。アンチモニーの世界生産量の8割を占める中国は、原料となる鉍石について自国生産だけでなく、ロシアやタジキスタンなどからも輸入している。新型コロナの感染拡大で鉍山の操業停止や国境封鎖などが行われたもようで、鉍石の供給が滞っているという。

一方、アンチモニーの需要は、家電や自動車で使う難燃剤向けといった分野で底堅い。

ロシアのウクライナ侵攻も相場を押し上げている。経済制裁でロシアの国際決済が困難になり、中国向けに鉍石が一段と流れにくくなるとの見方が浮上。欧州の一部需要家が、品薄が深刻になる前にアンチモニー地金を買進めているとの情報もある。価格は当面高止まりするとの見方が多い。